

である。それに対し、(80)は、「酒を飲みたいという欲求をコントロールする」くらいの意味で、動作そのものを抑制するというのではない。

つまり、「こらえる」はあくまで「動作」を抑制することであって、その動作を起こす要因となっているものは主体には抑制できない状態にある。それに対して、「がまんする」は動作を起こす要因そのものをコントロールすることである、といえる。

「がまんする」の主体が基本的に人間に限られるということも、「忍耐の対象とする」「妥協する」「コントロールする」という意味をもつ語だからであるといえよう。

4. まとめ

以上の分析から、「たえる」「こらえる」「がまんする」の意味特徴は、次のようにまとめられよう。

「たえる」

外からの圧力に対抗し、主体自身の状態を変化させないでいること。

「こらえる」

主体の意志に関係なく起こる主体内の状況によって、主体が不本意な動作を起こさないようにすること。

「がまんする」

状況を不本意ながら受け入れて、その状況を維持すること。

<注1> 「新明国」で用例にあげられている、「けがの痛みをたえる」も、若干なじみにくい、適切な文であろう。しかし、ここでは扱わない。

<注2> 対象として「Sノ」が不自然な場合も多い。

(81) *周囲から笑われるのを たえる。

(82) *周囲から笑われるのを こらえる。

(83) *周囲から笑われるのを がまんする。

(84) *両親から怒られるのを たえる。

(85) *両親から怒られるのを こらえる。

(86) *両親から怒られるのを がまんする。

<注3> 3.2.で「こらえる」の自動詞的な例とした(7)でも、この意味は保たれていて、「がまんする」といいかえることはできない。

(87) (千代の富士に土俵ぎわまで押された朝潮が)土俵から外へ出ないように こらえる。

(88) * (千代の富士に土俵ぎわまで押された朝潮が)土俵から外へ出ないように がまんする。

言語経歴：1957年6月 千葉県市川市生 現在に至る。

(東京都立大学大学院学生)

「とおる」「すぎる」「ぬける」と中国語語彙との対照

閻 小妹

1. はじめに

本稿では、日本語の「とおる」「すぎる」「ぬける」三語を取り上げて、これらに対応と思われる中国語語彙を比較分析してみたい。ここで分析するに際して、移動の場合に限って進めていきたい。「盛りをすぎる」「鼻がとおる」「栓がぬける」などの用法に今回ふれないことにする。

日本語の「とおる」「すぎる」「ぬける」に関する記述及び意味論研究については、森田1977、柴田編1979、国広編1982、杉本1984等を参考にした。

2. 辞書の記述

まず、『日中辞典』、『新日漢辞典』の記述をみよう。ここは、やはり移動に関するもののみを掲げる。

「とおる」に対応する中国語語彙が次のようである。

「過」「通過」「穿過」

「すぎる」に対応する中国語語彙が次のようである。

「過」「通過」「經過」「越過」

「ぬける」に対応する中国語語彙が次のようである。

「過」「通過」「穿過」

さらに、以上掲げられたいくつか、中国語の動詞の意味記述をみよう。

「過」 從一個地点或時間移到另一個地点或時間，經過某個空間或時間。(ある所、あるいは、時間から、他の所、時間へ移動する。ある空間、あるいは時間を經過する。)

「通過」 從一端或一側到另一端或另一側。(ある一端、こっち側から、他の一端、向う側に至る)

「越過」 經過中間的界限，障礙物等由一边到另一边
(途中の限界線，あるいは，障害物を經過して，こっち側から，向こう側に至る)

「穿過」 通過〔孔，隙，空地等〕(穴，隙間，空地等を通過する)

「經過」 通過〔処所，時間，動作等〕，(通過する〔場所，時間，動作〕)

3. 分析

3.1. 「とおる」と「過」「通過」「穿過」

森田1977では，移動の「とおる」を二つに分けている。その一つは「通路の中を，それに沿って向こう側へと移動し，抜けること」とし，もう一つは，「特定地点，領域を經由して向こう側へと抜ける」としている。(p.31)

3.1.1. 通路をとおる場合

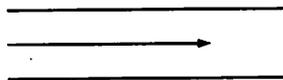
まず例をみよう。(以下中国語の訳は，直訳としてはできない場合，×にする)

- (1) 道を とおる。
- (2) *過馬路。
- (3) *通過馬路。
- (4) *穿過馬路。

(2)(3)(4)の「過」「通過」「穿過」は，「わたる」という意味しか取られない。

(1)の例の場合，通路に沿っての移動で，出発点，到着点意識されない時には，中国語の「過」「通過」「穿過」いずれも使えないのである。(注1)

図1



- (5) 汽車が トンネルを とおる。
- (6) 火車過隧道。
- (7) 火車通過隧道。
- (8) 火車穿過隧道。
- (9) 橋を とおる。
- (10) 過橋。
- (11) 通過橋。
- (12) *穿過橋。
- (13) 商店街を とおる。
- (14) 過商店街。
- (15) 通過商店街。
- (16) 穿過商店街。

(17) 船が 海峡を とおる。

(18) 船過海峡。

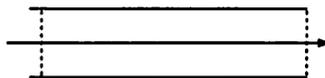
(19) 船只通過海峡。

(20) 船只穿過海峡。

(5)から(20)の例をみよう。トンネル，橋，商店街，海峡などは，あるきまった長さをもつ通路になっている。こういう通路に沿って，移動する場合には，「とおる」と中国語の「過」「通過」「穿過」とは，ほとんど同じく使われる。ただし，(12)の例は，橋の下をとおるということになっていて，通路と交差する意味である。

以上の(5)から(20)までの例を図で示すと，次のようである。(例文12を除く)

図2



「とおる」の移動は，通路に沿って移動することであるが，中国語の「過」「通過」「穿過」は，果てのある通路に沿って移動するに限られている。

3.1.2. 経由点を通過する。

これから，ある特定地点，領域を經由して向こう側へと移動する場合を考えてみよう。

- (21) 校庭を とおる。
- (22) 過校園。
- (23) 通過校園。
- (24) 穿過校園。
- (25) 飛行機が この町の上空を とおる。
- (26) *飛機過這座城市的上空。
- (27) 飛機通過這座城市的上空。
- (28) 飛機穿過這座城市的上空。
- (29) 部隊が 沙漠を とおる。
- (30) 部隊過沙漠。
- (31) 部隊通過沙漠。
- (32) 部隊穿過沙漠。

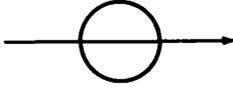
杉本1984によれば，「その領域に方向性が認められない場合，あるいはその方向性に従わずに移動する場合，領域外部の二点の存在が想定され，そしてこの領域外部の二点の存在によって，その領域は経由点と解釈される」(p.10)

(22)(23)(24)(27)(28)(30)(31)(32)「過」「通過」「穿過」を用いた文も，上と同様な用法をもつと考えられる。ただし，(26)の例は，飛行機が飛ぶ動作で，「とおる」には，その動作も含まれていると考えられる。一方，(26)の例は，中

国語「過」の前に「飛」という字を入れないと、(29)の訳文になれない。

図3で、(21)から(32)までの例を示す。

図3



- (33) バスが 駅前を とおる。
- (34) 汽車従車站前面過。
- (35) 汽車従車站前面通過。
- (36) 汽車従車站前面穿過。
- (37) 改札口を とおらなければ、外へは出られない。
- (39) 不過剪票口出不能。
- (40) 不通過剪票口出不能。
- (41) 不穿過剪票口出不能。
- (42) 箱根の関所を とおらなければ、江戸にはいけない。
- (43) 不過箱根関口就去不了江戸。
- (44) 不通過箱根関口就去不了江戸。
- (45) 不穿過箱根関口就去不了江戸。

(33)の駅前、(37)の改札口、(42)の関所のような点的に把えた場合でも、中国語の「過」「通過」は、「とおる」と同じ用法があるが、「穿過」は、使いにくくなる。(36)は、もし駅前を駅前の広場に言いかえれば、「穿過」は使える。

(46) 汽車穿過車站前的広場。

(41)と(45)の場合、どうしても点的に把えることになっているから、「穿過」は使いにくいのであろう。

3.2. 「すぎる」と「過」「通過」「経過」「越過」

はじめの所で見たように、「すぎる」と対応する中国語は、「過」「通過」「経過」「越過」になっている。これから、「すぎる」と以上掲げた四つの中国語とを比較分析していく。

杉本1984では、「すぎる」の移動は次のように説明されている。「NP₁によって指示されるものが、NP₂によって指示される領域の外部から内部に移動し、再びその外部に移動する」

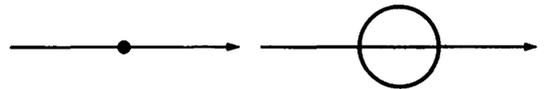
以下では、この記述に従って分析を進める。まず例をみながら、「すぎる」と「過」「通過」「経過」「越過」を比較してみたい。

- (47) 本屋の前を すぎる。
- (48) 従書店前面過。

- (49) 通過書店前面。
- (50) 経過書店前面。
- (51) 越過書店前面。
- (52) 市街地を すぎる。
- (53) 過市区。
- (54) 通過市区。
- (55) 経過市区。
- (56) 越過市区。
- (57) 交差点を すぎる。
- (58) 過十字路口。
- (59) 通過十字路口。
- (60) 経過十字路口。
- (61) 越過十字路口。
- (62) 横浜を すぎれば東京はもうすぐだ。
- (63) 一過横浜、馬上就是東京了。
- (64) 通過横浜、馬上就是東京了。
- (65) 経過横浜、馬上就是東京了。
- (66) 越過横浜、馬上就是東京了。

以上の例を見たように、「すぎる」の移動する領域というのは、広さのある市街地でも、交差点というようなものでも、ほとんどかまわない。そして、中国語の「過」「通過」「経過」も同様である。図4で、示しておく。

図4



ただし、(51)(56)(61)(66)では、「越過」が使えないことがわかる。

「越過」には辞書の記述にもあったように、障害物を經由するというニュアンスがあるが、本屋の前、市街地、交差点、駅といったものは、障害物としてとらえられないためであろう。

- (67) 峠を すぎる。
- (68) 過山岭。
- (69) 通過山岭。
- (70) 経過山岭。
- (71) 越过山岭。

(67)の峠のように、障害物と、とらえられるものであれば、「越過」を使うことができる。

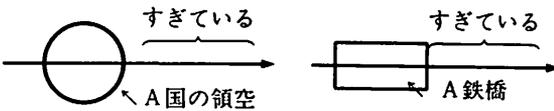
次は、アスペクトの観点から、「すぎる」の特徴をみていこう。

- (72) 飛行機が A国の領空を すぎている。
- (73) 汽車が A鉄橋を すぎている。

(72)の場合は、飛行機がすでにA国の領空を出た状態

であり、(73)は、汽車がA鉄橋の上を走って移動することではなく、汽車がもうA鉄橋をわたり、向こう側にいることを表わしている。つまり、「すぎている」の形は、移動の動作が継続している状態を表さず、すでに、ある領域、地点を移動する動作が完了したその結果、あるいは状態を表わすものである。すなわち、動作の主体は、領域の外側にいるのである。したがって、「すぎる」は瞬間動詞の特徴をもっている。図5で(72)(73)の状況を示す。

図5

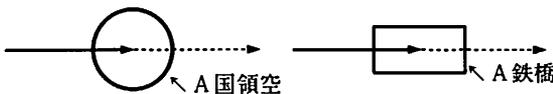


しかし、中国語の「過」「通過」「経過」「越過」のいずれも、動作が進行中であることを表わすことができる。次に、「過」「通過」「経過」「越過」の前に「正在」という動作の進行中を表わす副詞をつけて、例文をみよう。

- (74) 飛機正在(飛)過A国領空。
- (75) 飛機正在通過A国領空。
- (76) 飛機正在経過A国領空。
- (77) 飛機正在越過A国領空。
- (78) 火車正在過一座鉄橋。
- (79) 火車正在通過一座鉄橋。
- (80) 火車正在経過一座鉄橋。
- (81) 火車正在越過一座鉄橋。

(74)から(81)までの例を図6で示しておく。

図6



以上分析してきたように、「すぎる」は、瞬間動詞の特徴をもっている所では、中国語の「過」「通過」「越過」と、大きな違いがみられる。(注2)

3.3. 「ぬける」と「過」「通過」「穿過」

杉本1984では、「ぬける」は「NP₁によって指示されるものが、NP₂によって指示される領域の内部から外部に移動する」と記述されている。(p.10)

以下、この特徴を中心として、「ぬける」の中国語の「過」「通過」「穿過」との比較分析に入っていく。

- (82) 森をぬける。
- (83) 過森林。

- (84) 通過森林。
- (85) 穿過森林。
- (86) 電車がトンネルをぬける。
- (87) 電気火車過隧道。
- (88) 電気火車通過隧道。
- (89) 電気火車穿過隧道。
- (90) 人込みをぬける。
- (91) 過人群。
- (92) 通過人群。
- (93) 穿過人群。
- (94) 裏道をぬける。
- (95) 過小路。
- (96) 通過小路。
- (97) 穿過小路。

(82)(86)(90)(94)の例は、みなある領域の外部へ移動することと考えられる。そして、(83)(84)(85)(87)(88)(89)(91)(92)(93)(95)(96)(97)の例のように、「過」「通過」「穿過」をいずれも使うことができる。

国広1982では、「ぬける」について、「移動主体の周辺には何かが迫っている。それは狭い場所であったり、人や物の群であったりする」と指摘されている。中国語の「過」「通過」「穿過」の場合、以上の例をみたように、「ぬける」と同じ用法があるものの、その差も出てくる。

(83)(84)の例をみよう、森という領域の外部へ移動することで、森の中に道があるかどうか、ということには関心がない。しかし(85)の場合、森という領域の外部へ移動するに際して、なにかの難関を克服することが必要に思われたり、森の中に道がなく、迂余曲折しながら、やっと森を出たというイメージが頭にうかんできたりするものである。

(91)(92)の場合では、人込の密度については、制約がないこと、あるいは、ある程度の秩序があることを予想されるが、(93)の場合では、人込の密度が高く、無理に人をかきわけながら進むということがイメージされる。あるいは、人込の隙間をみながら進むというニュアンスがある。

それから、(95)(96)の例をみよう。裏道があつて、そこを移動することだけであるが、(97)の場合では、二つの読みができる。一つは、裏道が目的地まで表道りより近いこと、すなわち、近道であること、もう一つは、人目をこわがって、表道りより裏道のほうが安全であること。

- (98) はやく裏道をぬける。
- (99) 快点過這條小路。

- (100) 快点通過這条小路。
- (101) 快点穿過這条小路。
- (102) ゆっくりと 裏道を ぬける。
- (103) 慢々地過這条小路。
- (104) 慢々地通過這条小路。
- (105) ? 慢々地穿過這条小路。

以上の例では、「ぬける」は、ある領域の外部へ移動するに際して、そのはやさと関係がないようであるが、中国語の「過」「通過」も「ぬける」と同じである。ただし、「穿過」のほうは、できるだけ早く移動することが望ましいようである。目的地まで、もしいくつかの道があるならば、近道とか裏道を移動することが、「穿過」にふさわしいようである。

- (106) 弾丸が 胸から 背中へ ぬけていた。
- (107) ? 子彈過了胸膛。
- (108) ? 子彈通過了胸膛。
- (109) 子彈穿過了胸膛。
- (110) 光が 壁の隙から ぬける。
- (111) * 灯光過牆縫。
- (112) * 灯光通過牆縫。
- (113) 灯光穿過牆縫。

ここの(106)(107)(108)(109)を見ると、「ぬける」と「穿過」とは、ある領域の中を移動する時、通路、あるいは、経過がなくても、移動主体が常に外部、周囲からの圧力に対して、抵抗したり、避けたりして、領域の外側へ出る積極性をもっている。

次に「ぬける」と「過」「通過」「穿過」の動作性についてみよう。

- (114) 森を ぬけている。

ここは、すでに森の外側にいることを示している。つまり、「ぬけている」は「すぎている」と同じように、瞬間動詞の特徴をもっていて、進行中の動作を表せないものである。一方、中国語の「過」「通過」「穿過」のいずれも、進行中の動作を表すことができる。

- (115) 正在過一片森林。
- (116) 正在通過一片森林。
- (117) 正在穿過一片森林。

4. 結び

以上の分析を表でまとめてみる。

	とおる	過	通過	穿過
通路の中をそれに沿って移動する	○	×	×	×
長さをもつ通路の中を移動する	○	○	○	○
通路と交差する形で移動する	?	○	○	○
ある特定地点、領域を経由して向こう側へ移動する	○	○	○	○

	すぎる	過	通過	経過	越過
主体はある領域の外部から内部に移動し再びその外部に移動する	○	○	○	○	×
移動する領域は、障害物ととらえる場合	○	○	○	?	○

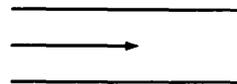
「すぎる」は、瞬間動詞の特徴をもっている所では、中国語の「過」「通過」「経過」「越過」と違っている。

	ぬける	過	通過	穿過
ある領域の内部から外部に移動する	○	○	○	○
通路のない、ある領域の内部から、外部に移動する	○	?	?	○
移動のはやさとの関係	○	○	○	?

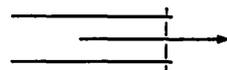
「ぬける」は、瞬間動詞の特徴をもっていることでは、中国語の「過」「通過」「穿過」と違っている。

〈注1〉 筆者は、北京旅遊学院で、日本語を専攻とする二年生に「道とおる」を中国語の訳をもらい、さらに図を書いてもらった。その結果は、

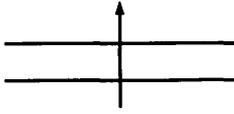
- ① 順着馬路走。沿着馬路走。(道に沿って歩く。)



- ② 過馬路。
通過馬路。
穿過馬路。



- ③ 過馬路。
通過馬路。
穿過馬路。
(道をわたる)



〈注2〉 筆者は、例文(72)(73)の中国語訳を、11人の中国人にしてもらった。(11人は、北京大学大学院の院生で、日本語を第二外国語として、3年間ないし9年間ほど勉強してきたものである)調査

の結果をいうと、「すぎている」を、移動動作の進行中だと訳した人は、10人であった。すでに移動動作が完了し、結果として、動作の主体が移動する領域の外側にいる状態だと了解した人は、1人しかいなかった。つまり、11人中、10人ほど、(72)(73) (図5) の状況を、(74)から(81)まで (図6) の状況だと考えたわけである。

言語経歴：1953年4月から1983年2月まで中国西安市 1984年4月まで横浜市神奈川区 現在東京都目黒区 (東京都立大学大学院学生)

ふく(拭)・ぬぐう

仲野 智

1. はじめに

小論でとりあげる「ふく」「ぬぐう」については、徳川・宮島1972 (p.342) で次のように記述されている。「ふく」「ぬぐう」それほど大きなちがいはなく、「汗を(ひたいを・よごれを・机を)～」などについて、「ふく」「ぬぐう」どちらも使える。ただし、どちらかといえば、「ふく」は、ひたい・机など、きれいにされるもののほうに、「ぬぐう」は、汗・よごれなど、とりさられるもののほうに、重点がある。それで、ひろい場所の全部を対象として、「ろうかをすみからすみまでふく」のようならば、あいには、「ぬぐう」よりも「ふく」が適当だ。

【文体】「ぬぐう」は文章語的。

また、柴田編1976 (p.111~112) では、「ふく」を「とぐ」(研)「みがく」(磨・研)と比較し、「さっと一息に、つまり片道運動によってフキ取る」「対象物とは別の物を取り除く」「対象物がよごれていない状況にする」としているが、「ぬぐう」について具体的な意味分析をおこなっているものは見当たらない。

小論では、これまで比較されることのなかった「ふく」と「ぬぐう」の二語について、意味分析をおこなう。

2. 辞書の記述

『日本国語大辞典』では、「ふく」「ぬぐう」は次のような記述がなされている。

「ふく」 布・紙などでよごれなどをふきとる。ぬぐう。

「ぬぐう」 ①ふいてきれいにする。こすって除く。ふきとる。ふく。
②恥・汚点などを消し去る。きよめる。そそぐ。

「ふく」「ぬぐう」が互いの意味の説明のために使われていることと、2.に当たる用法が「ぬぐう」にしか見られないことに気付く。この点については、他の辞書でも大差はない。

3. 分析

3.1. 動作の主体

- (1) 太郎が 顔を ふく。
- (2) 太郎が 顔を ぬぐう。

上のように両語とも人間を主体とする。人間以外のものでは、

- (3) マストの突端の日章旗が星をぬぐうようにはためいて……

(石川達三・蒼氓) (『学研国語大辞典』より)

のように非情物を主体とした用例も見られるが、それらは擬人的な用法と考えるべきであろう。したがって、「ふく」「ぬぐう」とともに動作の主体は、人間またはそれに準じるものとする。

3.2. 動作の対象